

[昭和48年度]九州大学農学部附属演習林研究経過報告表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/1462220>

出版情報：演習林研究経過報告．昭和48年度，1974．九州大学農学部附属演習林
バージョン：
権利関係：

演習林研究経過報告No.12によせて

木 梨 謙 吉

九大演習林研究経過報告は昭和48年度で通巻12冊となり、およそ十年余の才月を経たことになる。演習林の研究は長期的なものが多いから、僅かながらでも積み重ねていく努力が必要であると思われる。このことは大変貴重なことにちがいない。しかし一方社会という現実の世界はかなり早い速度で変化していることも事実である。それはこの研究経過報告が発足した昭和38年と現在では社会の森林に対する要請というか、見方は相当の差があるように思われる。一口に明快な表現はむすかしいが、たとえば自然保護とか森林環境の保全という言葉が、大気汚染とか公害という言葉とともに日常の会話の中に非常に多く用いられるようになった。また経済的な面で資源の供給や流通が10年以前とは予想もしないほど変化してきたことも事実である。外材の輸入は他の物資とともに飛躍的に増大している。

このような社会的な変化の中で、林学もまた時代とともに進歩していかねはならない。

たとえばニューヨーク・ステート・ユニバシティーとして有名な林学のシラキュース大学はCOLLEGE OF ENVIRONMENTAL SCIENCE AND FORESTRY という名称にかわり、その中の SCHOOL は (BIOLOGY, CHEMISTRY, ECOLOGY) (ENVIRONMENTAL AND RESOURCE ENGINEERING) (ENVIRONMENTAL AND RESOURCE MANAGEMENT) (LANDSCAPE ARCHITECTURE) となっていて新しい時代への姿勢がうかがえる。これは単に一つの例であるが、林業の必要性を十分に認識すればする程、森林環境の重要性を銘記しなければならない。学問的にも自然科学の基礎情報を与えてくれる森林の研究の重要性をふまえ、森林環境の保護育成、林業経営、林産物収穫など種々の研究活動と実践の中で、演習林の研究者はそれぞれの分野で相互に十分の協調を持って進まねはならない。わたしたちは与えられた演習林での研究態勢を考えると、すでに数年前このような構成をみずからみなで考えていたのを思いおこす。

現在九大林学科および演習林には有能な研究者がそろい、演習林現地としてもかなり広い地域にまたがって、各種の林学に関する研究はそれなりに可能な実情にある。

このような態勢の中で、演習林研究経過報告が次第に各種の研究の積み重ねに果たす役割は今後とも一層重大となるであろう。時代の変化に対応しつつたとえ僅かな研究でも、気長く積み重ねてゆきたいと念ずるものである。